

現代語に於ける並列助詞「たり」の一用法：仮想的 事態提示形式「たりして」

京, 健治
岡山大学大学院社会文化科学研究科

<https://doi.org/10.15017/1445864>

出版情報：文献探究. 51, pp.30-39, 2013-03-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



現代語に於ける並列助詞「たり」の一用法

－仮想的事態提示形式「たりして」－

京 健治

1. はじめに

並列助詞「たり」には、「動作や状態を並列して述べる用法（泣いたり笑ったりする）」、「ある動作・状態を例示し、他の場合を類推させる用法（枝を折ったりしてはいけない）」があるが、森山（1995）（1997）では、現代語の「たり」に於いて、「たりして」の形を取ったものが、「冗談用法」－極端な異常事態を例示・想定する用法－として使用されることを指摘する。ここでいう「冗談用法」とは、次のようなものである。

- (1) [うどんを食べるときに、テーブルの上にマヨネーズがあるのを見て、冗談で、]

うどんにマヨネーズをかけたりして。

【森山（1995）による】

- (2) (浮ついた噂を) 案外自分で一生懸命流したりして。男装して自分のアパートに入るところを友達にフォーカスしてもらったりして

(荻野アンナ『背負い水』)

【森山（1997）による】

(1)「うどんにマヨネーズをかけたりして」、(2)「案外自分で一生懸命流したりして」「男装して自分のアパートに入るところを友達にフォーカスしてもらったりして」のように、通常では「ありそうもない事態」を「想定」し、それを「～たりして」の形で提示する用法のことである。森山（1995）（1997）は、こうした「たりして」による冗談用法について、並列助詞「たり」の有する一部列挙という列挙のあり方及び「たりして」という連用形での言いさしの形での使用に注目し、「たりして」と冗談用法との関係を論じられており、示唆される点が多いが、「極端な異常事態」「ありそうもない事態」という性格と、並列助詞「たり」の一部列挙という用法との関係についてはもう少し考えてみる必要もありそうに思われる。さらに、「(異常な) 事態」を「想定する」ということからすると、この用法に関してはモダリティという観点からの分析も試みられてよいようにも思う。そこで、本稿では森山（1995）（1997）で取り上げられた「たり」の冗談用法について、考察を加えてみようと思う。

2. 冗談用法「たりして」

森山（1997）に於いて、〈我々は、いつも大まじめで話をしているわけではない。時にはありそうもないことを冗談として語ったりもする。おもしろいことに、日本語には、そういう場合の「冗談の標識」とでも言いたくなるような形式がある〉と述べ、前掲（1）（2）に示した「たりして」がそれであるという。類例を（3）（4）に示そう。

- （3）次男の俳優篠山輝信（25）と南海キャンディーズのしずちゃんこと山崎静代（30）のロマンスが報じられたばかりの篠山は「しずちゃんのことはいいの？ 僕は分からない。（次男とは）別人格だから」と自ら切り出した。「次は、しずちゃんがモデルですか」と聞かれると「いいですよ。でも、息子に『許せん』と刺されたりして（笑い）。

(<http://www.nikkansports.com/entertainment/news/f-et-tp0-20090807-528112.html>)

- （4）エレベーターホールの壁には、こんな写真（↓）【写真省略：京注】が飾られていたのだが…／成龍（ジャッキー・チェン）、李安（アン・リー）監督、馬友友（ヨーヨー・マ）、ホセ・カレーラス、／レディ・ガガ、イル・ディーヴォ、ジェラルド・ドパルデュエ等々…。日本からは安藤忠雄も。／何これ？ このホテルを訪れた著名人ってこと？ スパイダーマンも居るんだけれど（笑）。／着ぐるみの中、中村獅童だたりして。

(<http://blogs.yahoo.co.jp/sweetmango727/53580537.html>)

[ブログ等からの引用に際し、1行改行の場合、スラッシュ1つ（／）、2行改行の場合はスラッシュ2つ（／／）のように表記する。以下、同じ。]

「たりして」と冗談用法との関係について、森山（1997）では以下のように述べておられる。

うどんにマヨネーズをかけたりして。

という場合、タリ構文があることによって、「うどんにマヨネーズをかける」ことだけを取り上げて問題にするのではないという意味になる。あくまでも状況全体に対してその一部の事態として言う意味であって、それが、いわば「よりによって～」という、極端な事態の在り方を一例として提示することになるのである。こう考えれば、ここでの「冗談」とは、極端な異常事態を例示・想定することとして位置付けられよう。事態を部分的な例示として取り上げるところに「冗談」としての意味、つまり、あくまで例示であって、そのことだけを大まじめで（？）考えているのではないという意味が生じる余地ができるのである。

もつとも、冗談用法には、もう一つ条件がある。例えば、

うどんにマヨネーズをかけたりした。

というだけでは冗談の言い方にはならない。ただの異常な事態である。ここから、

文末が非終止の形で、テンスを分化させていないということも重要だと思われる。テンスが分化すれば、現実的な時空に位置付けられることになり、冗談としての仮想的な意味（現実ではないという意味）は出てこないからである。「たりして」という、いわゆる連用形のまま、いわば言いさしの形で提示することは、そういう点で重要な条件だと言える。

「～たりして」と「冗談用法」との関係について、ここで述べられていることを整理すると、

- ① 極端な異常事態を例示・想定するが、これは「たり」の一部列挙という並列の方法と関係すること。
- ② 仮想的意味は連用形で言いさすことによって、テンスを分化させないことから生じること。

ということになる。すなわち、冗談用法とは極端な異常事態〔P〕を想定し、それを「たりして」という形式で表すものということになる。（以下、「Pたりして。」と表記する。）

「冗談用法」に於ける仮想的意味は森山氏の説かれるように、「～たりして」という言いさしの形で提示することによるもの（上記②）と見てよさそうに思うが、一方の表現性（上記①）についてはもう少し考えておく必要があるように思う。

森山氏は〈タリ構文があることによって、「うどんにマヨネーズをかける」ことだけを取り上げて問題にするのではないという意味になる。あくまでも状況全体に対してその一部の事態として言う意味であって、それが、いわば「よりによって～」という、極端な事態の在り方を一例として提示することになる〉のように、「たり」の一部列挙という性格との関係を示されている。前掲（1）（2）の「たりして」を見るに、「うどんにマヨネーズをかける行為」（＝（1））、「噂を自分で流す行為」「男装して友人にフォーカスしてもらおう行為」（＝（2））は通常行われないう行為である。そういう意味に於いて、これら「～たりして」で示される事態は「ありそうもない事態」「異常な事態」であるといえよう。このように見えてくると、「Pたりして。」では「ありそうもない事態」「異常な事態」が示されるようであるが、こうした表現性と「たり」の例示的用法との関係については、なお考察の余地がありそうに思う。（5）を見られたい。

（5）〔撮影禁止区域で、（冗談で）〕

ここで記念写真撮ったりして。

（5）はここでいう、冗談用法と見られるものであるが、「記念写真を撮る行為」そのものは何ら異常な事態でもない。こうした行為が「異常なもの」となるのは、それが行われる状況、すなわち、「撮影禁止区域」という場に於いての行為であるからであろう。「ありそうもない事態」「異常事態」という性格は、言うなれば、そうした事態が

ある状況下に於いて、相応しくない事態である、ということになる。

前掲（１）から（４）を見るに、「Pたりして。」では、「ありそうもない事態」「極端な異常事態」という性格を有すると思われる事態が述べられているが、そういった評価性が存することについて、これは提示される事態そのものの性格というよりは、むしろ、「～たりして」という表現形式をとることが深く関わっているのではないかと思う。

3. 仮想的事態提示形式「Pたりして。」

「Pたりして。」は仮想された事態を提示する表現形式であると見られるが、それでは、如何なる性格の事態が想定されているのであろうか。本節ではこの問題について考察を行うことにする。

「Pたりして。」の形で提示される仮想的事態に着目すると、[A] 将来での出来事を想定するもの、[B] ある状況に対して話し手が推測した事態とがあるように思う。

まず、[A] に該当する例を示そう。

（６）今日は快晴の青空、日差しもあり岩手山もクッキリ、100 点満点のコンディション。しかし肝心／の桜がまだ3分咲きの状態。今週末には満開を迎えると思いますが、今度は雲行きが怪しくなっ／たりしてね。上手くいけばいいのですが。
(http://blogs.yahoo.co.jp/kfuji_taxi)

[ブログ等からの引用に際し、1行改行の場合、スラッシュ1つ（／）、2行改行の場合はスラッシュ2つ（／／）のように表記する。以下、同じ。]

（７）奈良の訪問では、大仏さんも、素敵でしたけど、この／「仁王様との再会」／が、なんとも、思い出に残っています。／後悔しているのは、何で／「そのお姿をスケッチさせていただかなかったか・・・」／ということですけど、また、機会はあるでしょうね。／・・・って、次、来た時は／「子供の頃のように、恐ろしく見え」／たりして(^-^)

(<http://blogs.yahoo.co.jp/masahikom1936>)

（６）では、桜を見に行くにあたって、今度は雲行きが怪しくなり、桜を見る環境としては不都合な状況になるという事態を想定している。（７）では、今度、仁王像を見に来る際に、今回とは異なり、「恐ろしく見え」るかもしれないということが想定されている。「今度は」（＝（６））「次、来た時は」（＝（７））に示されているように、将来の出来事を推測している。

グループジャマシイ（1998）の【たり】に於ける [4…たりして] として示されているものは上記の②に該当するものである。

（８）A：変だね、まだだれも来てないよ。

B：約束、あしただたりして。

(9) A：佐野さん、遅いわね。

B：ひとりだけ先に行ったりして。

(8)(9)に対する意味記述として、〈例をひとつあげる言い方。ほかにも可能性があるという含みで、直接はっきり言うことを避けるときなどに使われる。距離を置いたやゆ的な表現。若い人のくだけた話しことばに使われることが多い。〉とある。「やゆの表現」とあることから、冗談用法に該当すると思われるが、前掲の(5)から(7)に於ける「Pたりして。」は発話時以降の事態生起を述べているのに対して、(8)(9)の場合は、発話時点に於ける状況に対する話し手の判断が示されるという点で異なるように思う。たとえば、(8)では「だれも来ないね」という発言に対して、「約束は明日である」という可能性を、(9)では「佐野さん、遅いわね」との発言に対する解釈として、「ひとりだけ先に行っている」という可能性を、ともに「Pたりして。」の形で提示している。

以上見てきたように、「Pたりして。」には、将来起こるであろうと想定される事態〔例：「うどんにマヨネーズかけたりして」〕と、ある状況に対する話し手による推測した事柄〔例：「約束、あしただたりして」〕が示されるものがあるといえよう。この2つの用法は、前者が「これから起こるであろう事態」、後者が「現状に対する判断」が述べられるとの違いはあるが、ともに、事態の可能性を示すという意味に於いては共通している。

「Pたりして。」は仮想的事態を提示するものと捉えられる（以下、「仮想的事態提示形式」と呼ぶ）が、その仮想されるところの事態の性格は、(10)から(13)に示すように、「案外」「もしかしたら」「意外と」「まさか」という副詞表現との共起からみて、可能性の低い事態を想定していると見てよさそうに思う。

(10) (浮ついた噂を) 案外自分で一生懸命流したりして。〈(1)再掲〉

(11) 今からでも遅くはない。あの頃できなかった逆上ガリを、練習してできるようになるよ！／…というようなポジティブな企画ではない。今回は。／「久しぶりにやってみたら意外とスルッとできちゃたりして！」っていう、都合のいい、そして怠惰な企画である。元々運動神経はかなりのレベルで悪かった僕。この期に及んで、努力する気は一切ない。

(<http://portal.nifty.com/2009/10/06/a/>)

(12) そっかそっか。カッチちゃんはいきさつ知らないんだった。南は原田くん以南風で頼まれごとをされたタツ／ちゃんが、とぼっちりを受けた顛末を教えてあげた。／「じゃ、この間のラブレターの？」／タツちゃんも意外に勘が良い。／「そ、あれは不良たちが原田くんを呼び出すためだったけど、もしか

したら嘘から出た真実 (まこと) だっ／たりして」

(http://blogs.yahoo.co.jp/birst_head)

(13) ガラガラの新名神に乗り、1 時間ちょっとで『なばなの里』に到着。／／駐
車場はわりと混雑。^マ。／／まさかディズニーばりのコミコミだっ／たりして？

(<http://4travel.jp/domestic/area/toukai/mie/yokkaichi/kuwana/travelogue/10674510/>)

これらの語に関して、(飛田良文・浅田秀子 (1994)) では以下の意味記述がなされて
いる。

- ・「案外」＝予想や期待と反対の結果になる様子を表す。
- ・「意外」＝予想や期待とは異なる結果になる様子を表す。
- ・「もしかしたら」＝可能性が低いことを仮定する様子を表す。
- ・「まさか」＝可能性が非常に低いという判断を表す。

以上見てきたように、「P たりして。」で想定されるところの事態は、その可能性が非常に低いものであろうと考えられる。このことは「冗談として考えられない」【森山 (1995)】、「極端な異常事態」【森山 (1997)】の記述と通ずるものと思われる。なお、前掲の(8)「約束、あしただっ／たりして。」、(9)「ひとりだけ先に行っ／たりして。」では、「案外」「まさか」等の副詞表現の使用は見られないが、いずれも、通常では考えがたいと捉えられる事態を想定しているものと捉えてよいように思う。

4. 「P たりして。」の表現性とその来由

以上、「P たりして。」の性格を見てきたが、この形式は、

- ・ある事態を仮想し、それを提示するものであること。
- ・提示されるところの事態は、その実現の可能性が非常に低いものであること。

という特徴を有していると思われるが、こうした語法は如何なる経緯で行われることになったのであろうか。この点について、森山 (1995) に次の見解が示されている。

(63) うどんにマヨネーズをかけたりして。

というのは、

(64) うどんにマヨネーズをかけたりしてみたらおもしろい。

のようなある種の評価の言い方をベースにもつと言えるのかもしれない。

と、「～たりしてみたらおもしろい」といった評価の言い方をベースにしていることが想定されている。ここで関連が説かれるところの「～たりしてみたらおもしろい」という表現は、たしかに評価に関わる言い方であるが、仮想的事態提示形式「P たりして。」に観察されるところの、可能性が低い事態を想定するという用法との関係が見られそうにないように思う。「P たりして。」の形で提示することと、その事態の性格との関係が問題になるが、筆者は、かかる表現形式のベースにあるのは、「連用形テーパー評価

語」ではないかと考えたい。

(14) そんなに大きな声を出しては魚が逃げてしまう。

(15) そんなにテレビばかり見ていては目が悪くなってしまふよ。

(14) (15) に示すように、述部に否定的な内容が述べられるものであるし、また、(16) (17) に示すように禁止用法にも使用される。

(16) フロッピーを磁石の近くに置いてはいけませんよ。

(17) 暗くなってから墓地に行つてはならない。幽霊が出るぞ。

以上見てきたように、「連用形+テハ一評価語」形式ではその述部が否定的評価に偏る傾向がありそうである。(14) から (17) は「連用形で+は」の形であるが、「たりして+は」の場合も同様である。

(18) 鼻先が飼い主のズボンの縫い目より後ろに来ていたり、肩が飼い主のズボンの縫い目より前にきていたりしてはいけない。／飼い主の足に触れることなく限りなく近い位置にいること。 (<http://blogs.yahoo.co.jp/emiko23sakura>)

(19) こんな純真なおチビさん達、68歳のじいさまをもホッとさせてくれる／力があります。ありがとう！／でももう少しすると、「知らない人には笑顔を見せてはダメ、手を振つ／たりしてはダメ」と教えられるのでしょうか。

(http://661040msts.at.webry.info/201012/article_3.html)

(20) のように、「～たりして」で提示される事態に対して、否定的な評価が下される例も見られる。

(20) 次に困ったことが、撮りたいバイクがいつ来るかわからない!!!のです。／暗くて、マシンのカラーリングが見えないんです。だから、うちのチームのバイクを識別／するのが困難!!! そこで、ストップウォッチを使って、ラップタイムを目安に、そろ／そろ来るはず!!! というのを頼りに、目を凝らします。でも時々違うバイクを撮つて／たりして、困ったチャンです。

(http://blogs.yahoo.co.jp/takabu_2000)

次例 (21) は評価に関する文言はないが、「電車が動き始めた」という事態が当人にとっては好ましくないことであることが示されている。

(21) 台風が通り過ぎて天気が良くなったのに、いつまで経っても電車が動き始めないんですよー(>_< /段々午後の会議の時間が迫つて来て、しかたないので、タクシーに乗ったら、電車動き始めて／たりして (^

(<http://blogs.yahoo.co.jp/dehehe11>)

以上、仮想的事態提示形式「Pたりして。」の表現性を考えるために、「～たりして一は一評価語」文の特徴を見てきた。ここで改めて、仮想的事態提示形式「たりして」の性格を考えてみることにしよう。

先に「Pたりして。」では、「ありそうにない事態」が示されると述べたが、こうし

た表現性は「～たりして—は—否定的評価語」という表現形式をベースにしたものであろうと思われる。「～たりして—は—否定的評価語」文では、「～たりして」で示される行為・事態は「好ましくない」「起こっては困る」ものであり、そうした事態生起の可能性は低いものであるべきものである。仮想的事態提示形式「Pたりして。」に観察されるところの表現性の来由を考える上で、上記の表現形式との関係を見ることができそうに思われる。

5. 仮想的事態提示形式「たりして」の表現性

前節までに於いて、「Pたりして。」の表現性およびその来由について考察してきたが、仮想的事態提示形式という性格に関しては、モダリティに於いて如何なる位置を占めるのかということも考える必要があるように思う。以下、この点について、少しばかり触れておくことにしたい。

ここでは、「Pたりして。」が可能性の低い事態を仮想するということを踏まえ、「かも（しれない）」と対照させて、その性格をもう少し考えてみようと思う。

日本語記述文法研究会（2003）に、

その可能性や必然性があることとして事態を把握するという認識的な意味を蓋然性という。可能性の認識を表す代表的な形式は「かもしれない」であり、必然性の認識を表す代表的な形式には「にちがいない」「はずだ」がある。

とあるように、「かもしれない」は可能性の認識を表す。さらに、「もしかすると」等の副詞とよく共起することも示されている。

非常によく共起する副詞として、「もしかすると」「もしかしたら」「もしかして」「ひょっとすると」「ひょっとしたら」「ひょっとして」などがある。これらは、1つの可能性として文を述べていることを表す副詞である。

「かもしれない」での可能性は、たとえば、森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（2000）にあるように、「低い」ものである。

「カモシレナイ類」に焼き付けられている確からしきは、低いタイプのものである。共起する副詞（相当）は、「モシカシタラ」「ヒョットシタラ」「万ガー」や「必ズシモ」（否定を要求）などが、中心である。

「かも（しれない）」は可能性把握であり、さらにその確からしさが低いという意味では「Pたりして。」も同様の意味を有するものである。

(22) あの偉そうにしている人、ひょっとして、ここの社長かもしれないね。

(23) あの偉そうにしている人、ひょっとして、ここの社長だったりしてね。

両者の違いは「かもしれない」が事態生起の可能性が低いものとしつつも、当人はそういう事態もありうると捉えているのに対して、「Pたりして。」の場合は、提示する

事態について、当人は通常では起こりえないことであると捉えている点にあるように思う。日本語記述文法研究会（2003）では、「かもしれない」には、相手の考え方や一般論に譲歩する用法がある）とし、次の（24）（25）を挙げる。

（24） 確かにおっしゃるとおりかもしれないが、こちらはこちらで立場があるのです。

（25） なるほどあの人は天才かもしれない。しかし、彼の人間性はほめられたものではない。

これらについて、〈この用法は、そのような見方も一方では成立しうることを認めたいうえで、別の視点からの主張を行うものである。〉とする。こうした用法から、「かもしれない」に於いては、確からしさが低いとはいうものの、発話者自身そうした事態について、あり得るものとの認識を持っていると見てよいであろう。一方の「Pたりして。」の場合は、むしろあり得ないと考えている事態を提示するものであり、両者は可能性把握のあり方に於いて、異なっているように思う。（26）を見られたい。

（26） 葉加瀬太郎さんのコンサートのあと、家に帰る途中。／近所の劇場の脇に大勢の人がたむろして、歓声が上がっていました。／／その劇場は最近 Oliver! という公演が始まったところ。／〈中略〉／「まさか、ミスター・ブーン だったりして!?」／と笑いながら横を見ると、旦那さんがいない!/?あれれれ??/?／あたりを見回すと、今まで一度も見たことのない素早い動きで、人ごみの中に駆けて行きました。／・・・ホンモノだ!!!

(http://woman.excite.co.jp/blog/sanpo/sid_299776/)

（26）では、大勢の人がたむろしている状況に対して、それは「ミスター・ブーンがいるからではないか」と推測している。当人は、よもやそうしたことはあるまいと思いつつも、ひょっとしたら、そういうこともあるかもしれないと、可能性の一つとして提示するものと考えられる。

6. おわりに

本稿では、森山（1995）（1997）で指摘されたところの「たりして」の冗談用法をめぐって、その表現性等を、あれこれ考えてみた。これまで述べてきたように、「Pたりして。」はありそうもない事態を仮想し、それを提示するものである。そうした表現性の経緯として、「～たりしては（否定的評価語）」といった評価に関する表現形式をベースにしたものであろうと推測した。なお、前節では仮想的事態提示という点に着目し、蓋然性評価の「かもしれない」との対照を通してその表現性にも言及した。「Pたりして。」のモダリティ表現の中での位置付け等に関しては考察すべき点が多分に残されているように思う。それらについては今後の課題としておきたい。

【参考文献】

グループ・ジャマシイ（1998）：『日本語文型辞典』／くろしお出版）

日本語記述文法研究会（2003）：『現代日本語文法④第8部モダリティ』／くろしお出版）

飛田良文・浅田秀子（1994）：『現代副詞用法辞典』

森山卓郎（1995）：「並列述語構文考—『たり』『とか』『か』『なり』の意味用法をめぐって—」（仁田義雄編『複文の研究』上／くろしお出版）

森山卓郎（1997）：「うどんにマヨネーズかけたりして—並立の意味（『月刊言語』第26巻第2号／大修館書店）

森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（2000）：『日本語の文法3 モダリティ』／岩波書店）

【付記】 本稿は、2010年度文学部プロジェクト研究「コミュニケーションの本質と実践に関する総合的探究」（第4回）にて、「〈文法化〉と〈コミュニケーション〉—現代語に於ける並列助詞「たり」の一用法—」と題した発表内容の一部をもとに、加筆修正を施したものである。

（きょう けんじ・岡山大学大学院社会文化科学研究科）